

## “専門連語”が示唆するもの ―連語の単位性と専門概念の名づけをめぐる―

小宮千鶴子

専門語は、「日常一般に使われる語（一般語，日常語）に対して，専門分野で専門の概念を表すために用いられる語」と規定される（石井正彦（2007）「専門語」『日本語学大辞典』）。専門語は大半が名詞で，「価格を決める」「価格を考える」（下線部は専門語，以下同様）などと使用される。前者のように「専門語とは別個に専門概念を表わす」連語は，小宮千鶴子（2002）「専門連語と専門連語辞書」（『情報知識学会誌』12-1）により“専門連語”と呼ばれている。「連語」という用語にはさまざまな規定があるが，“専門連語”における「連語」は，基本的に言語学研究会の規定に従う。「連語」は名づけの単位とされるが，そうであれば，“専門連語”は専門概念を名づける単位といえる。

「連語」に関しては，言語学研究会内にも異論がある。本発表は，「連語」の，範囲，分類，所与性，必要性に関して，“専門連語”が与える示唆を明らかにすることを目的とし，発表者が中学高校教科書から選定した経済の“専門連語”と化学の“専門連語”を資料にして，「連語」に関する先行研究を検討した。

その結果，連語の範囲は，「価格が上がる」「酸化と還元」などが“専門連語”であることから，「従属的なむすびつき」だけでなく「陳述的なむすびつき」「並列的なむすびつき」も連語の範囲に含めることが支持された。連語の分類は，“専門連語”では，従来の「カザラレ中心」ではなく，「分子が衝突する」「価格を決める」「強い酸性」「土地の価格」など「専門語中心」であることが示された。連語の所与性については，“専門連語”は，専門分野における正確な情報伝達のために特定の連語を覚える必要があり，所与性があることが示された。連語の必要性については，“専門連語”は，連語と同様に，ひとつの専門語だけでは表わせない，現象や状態，事物の側面など複雑な専門概念を表わすだけでなく，複雑な専門概念を名づけて一旦保存し，必要に応じて「景気循環」「高価格」などの複合語として送り出すプールの役割も果たしていることが示唆された。